

Title	近代世界外交問題解説(芦田均著, タイムス出版社版)
Sub Title	
Author	間崎, 萬里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.164(492)- 165(493)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

官民の調和を高調せられたけれども、政府は更に此點に留意することなく、たゞ民論の鐵壓に焦慮し、民論はこれに對してまず、反抗の勢を成し、官民共に閹墻の内争に没頭して、東洋政略の如きは復たこれを念頭に置く者なき有様であつた。かゝる間にも政府は四隣の形勢上我軍備の薄弱なる一點は流石に不安を感じながら、さりとて増税の決断は固より出来ないので、窮餘の窮策として明治二十年三月皇室から海防費の内へ内帑金三十萬圓を下賜されたのを機會とし、民間の富豪大家に海防費の獻金を勧誘し、其獻金者に位階を授くるが如き姑息の處置を執り、世間から位階賣買の譏を受けたのみで其効果は殆んど見るべきものがなかつた。かくの如き始末にして外交軍備共に退嬰消極何等の施設も見なかつた。其間に歲月勿々二十三年の國會開設となつたのである。……(第三卷六九四頁)

それから最後に書かねばならぬことは、著者が老境に入つた故を以て時事新報社を辭した後であつたにも拘らず、前後七箇年に互つたこの困難なる著作事業を引受けて、立派にこれを完成せしめたその旺盛なる氣力である。これ畢竟故師に對する報恩の一念に發起したものであることは言を俟たないが、一つはこの希れに見る偉人の業績を不朽に傳へて、明治文化の盛業に貢獻するところあるのみならず、後世萬人の師表を垂示せんとする希望に出でたものであらう。

以上はこの大著作のホンの一斑を傳ふるに過ぎない。併しながら、日本新文化の大恩人たる福澤先生のこの傳記が、先生の薰陶を受けた我等同窓に對して、非常なる興味と教訓とを與ふること

は勿論であるが、日本文化發達史の資料として、世間の史學研究家にとつても亦、容易に得べからざる参考書たることは、筆者の信じて疑はざるところである。併も著者の雄渾地麗にして暢達なるスタイルは、一般讀書家の讀物として、多大の薰化と興趣とを提供するであらう。(昭和七、九、三〇)(占部百太郎)

近代世界外交問題解説

(芦田均著)
タイムス出版社版

著者は「最近數ヶ月來の思想界には獨裁政治や武斷主義外交に關する議論が歡迎せられ、經濟界に於てさへ單位經濟萬能の思想から日滿抱合の形式が唯一の救濟策であるやうな主張が横溢してゐる。けれども世界に於てどれ程民族競争の格闘が尖鋭化したにしてもラヂオと飛行機の文明が距離を短縮して、吾人がそれを意識すると否とに拘らず、世界を一單位とする生活がしつかりと人の魂に喰ひ入つてゐる以上、所詮吾々の對照は常に六大洲であることを免れ得ない。亞細亞に立籠る主張を宣揚する者は尙海外の形勢の推移に飛耳張目しなければならぬ、聯盟を排撃するものは一層よく聯盟の心理を理解することが肝要である。」(はしがき二、三頁)と至當の主張をなし、「吾々が現在の世界より、よりよき生活に入る爲めには過去の史實を辿つてこゝに人類進歩の最善の航路を發見する外に途はない。私はこゝに過去十餘年の波瀾多き世界の動搖の跡を眺めて人生の航路に標識を打立てんとする人々の努力に、はかなき微力を致さんとする念願から歴史を讀む」(はしがき一頁)と。さうして本書は書かれたものである。

先づ『世界戦争後の變革』から説き起してナショナリズムの發生勃興を説き、『國際聯盟の成立及び成長』に及び、聯盟の概要を記し、次いで『歐洲』の篇にはヴェルサイユ平和條約の成立經過から、賠償問題、ルール占領、ドーズ、ヤング案、フーヴァーの支拂猶豫提唱までを説き、ロカルノ條約、不戰條約、歐洲聯合案等をも解説して、一九三二年の歐洲を概説してゐる。

その他、『北米合衆國』に於けるモンロー主義の發生變遷から、移民問題、軍縮問題に及び、更に『ソヴェートロシアの外交』を説いて日本との關係を明かにし、『中華民國』に於ける戦後の外交問題はその全般を盡し滿洲事變に及び、その對外關係に於てやゝもすれば邦人が忘却し勝る過去の條約關係に就いて親切なる注意が促がされてゐる。凡そ最近に出版せられた邦文の著述であつて、複雑にして波瀾多き戦後の世界に對し、これ程迄に纏つた。全般的知識を與ふる便利なる、書物は他に類を見ないであらう。この點大いに著者の綜合的努力に謝すべきである。

しかし乍ら本書と雖も、史學者の立場から之を見るときは、如何にそが火急の編述であるにしても、若干遺憾に思はれない點がないでもない。先づ第一に表題の『近代』といふ文字は我等の時代の區分としては首肯し難いものである。第二に我等はパリ講和會議、ヴェルサイユ平和條約と截然區別して書きたい處であるが、外交官であつた著者は却つてパリ會議の事は記述し乍らも(二九頁以下)ヴェルサイユに講和會議でも開かれたかの如き觀を抱かしめるのである(二、一三頁、七頁、一〇〇頁)、第三に『一月十八日は曾て普佛戦争の終つた際』(二八頁)とあるけれども、このとき普

佛戦争(之は獨佛戦争といつた方がよい)は終つてゐない。第四に米國は世界に於て最も新しい國である。千七百六十三年獨立を布告して以來(一三二頁)とあるが、大戦後の諸國の獨立を認めないのは戦後を取扱つた本書としては受取れない。獨立布告のデイトは云ふ迄もなく明白なる誤である。第五に、『昨年十月に入つて英國は金本位制度の維持さへ困難』(一二五頁)『程なく十月に入つては英國の金融恐慌、兌換停止の法令となり』(六九頁)とある。大陸諸國に於ける金本位停止の魁となつたこの最も重要なデイトは二箇所迄もかく誤を傳へてゐる。最後に西曆と我が年號とが混合して使用せられてゐることは(一〇一頁その他)世間一般の慣用ではあらうが、評者自身の主張としては改むべき點である。少なくとも本書の讀者には不便であらうと思ふ。(間崎萬里)

邦文西洋史文獻展覽目錄 (池田哲郎編)

近時、書目編纂の稍流行的にまでなりつゝあることは學界のたに喜ばしい現象である。表題の目錄は昨年十月下旬東北帝國大學法文學部に於ける同大學史學會の展覽目錄である。而して當目錄は明治三十年以前(十九世紀の刊行に係るものに限定例言)せられてゐるが、之に展覽し得ざりしものをも加へ、年代をも擴張して、漸次追補し完全なる文獻目錄を作るに於ては、修史に基づく本邦西洋史學の發達を大觀するの助となるであらうし、將來の學者に對し眞に學問的基礎を與ふることともなるであらう。

今後の西洋史學に正しき道を踐ましむべき礎が東北大學に於て